

白居易の愛した風景

— 杭州「西湖」へのトポフィリア —

鎌 田 出

(一) 緒言

杭州「西湖」が、景勝の地として廣く知られるようになるのは、一般に唐代以降のことであったとされる。例えば『咸淳臨安志』(卷之三十二)⁽¹⁾には、「(西湖)自唐及國朝、號游觀勝地」(傍點論者、以下同様)とあり、『大明一統志』(卷三十八)⁽²⁾には「山川秀發、景物華麗。自唐以來、爲東南遊賞勝處」とある。こうした景勝地「西湖」の誕生には、西湖の整備が深く關與していた。明の田汝成は、『西湖遊覽志』(第一卷)⁽³⁾で次のように語っている。

六朝已前、史籍莫考。雖水經有明聖之號、天竺有靈運之亭、飛來有慧理之塔、孤山有天嘉之檜。然華豔之蹟、

題詠之篇、寥落莫睹。逮于中唐、而經理漸著。

「逮于中唐、而經理漸著」とは、具體的には大暦年間と長慶年間それぞれ杭州刺史として西湖の整備に當つた、李泌と白居易の業績を指す。後に自らも杭州に二度赴任し、西湖の治水に盡力した宋の蘇軾は、「錢塘六井記」⁽⁴⁾に「唐宰相李公長源始作六井、引西湖水以足民用。其後、刺史白公樂天治湖浚井、刻石湖上、至于今賴之」と記している。杭州「西湖」の起源は、具體的には李泌・白居易の治水事業にあったと言える。

ところが、唐代詩歌に表れる「西湖」は、これらの後世の指摘とは趣を異にしている。唐詩人たちは、杭州に於ける「西湖」の存在を多くの場合無視していたのである。この事

實は、唐代の西湖が、詩興を喚起するに足る景勝たり得てい
なかつたことを意味すると思われる。そうした中で、一人中
唐の詩人白居易だけは杭州「西湖」に對して限らない愛情を
注ぎ、景勝地「西湖」を歌い上げる數多くの詩作を残してい
る。本論致では、こうした白居易の「西湖」に對する特別な
感情を、イーフォー・トゥアン氏の提唱する「トポフィリア」
という概念によって捉え、白居易と「西湖」との關わりの眞
相を明かにして行きたいと考へる。⁽⁶⁾

(二) 唐代の西湖

西湖の發展は、都市杭州と不即不離の關係にあつた。そこ
で先ず、唐代に至る西湖の沿革について簡単に眺めてみるこ
ととする。⁽⁷⁾

錢塘江の河口デルタに發展した杭州にとって、鹽分を含ま
ない水の確保は、都市の維持・發展の必須要件であつた。こ
のため、杭州は先ず溪水や泉によって眞水の確保しやすい山
嶽部沿いに發展した。例えば、劉宋時代に錢唐縣令であつた
劉道眞の『錢塘記』⁽⁸⁾には、「縣在靈山下、至今基趾猶存」と
記されている。隋代に治府が鳳凰山の麓に置かれたことも、
やはり水の確保を考へてのためであつた。

白居易の愛した風景(鎌田)

こうした中、隋の大業六年(六一〇)に丹陽から餘杭に至る
大運河が開通し、杭州の人口は飛躍的に増大する。この結
果、谷川や泉の水による生活用水の十分な確保は困難とな
り、杭州の水問題は新たな解決策を必要とすることとなつ
た。この問題の解決に最初に着手したのが、大曆年間に杭州
刺史として赴任した李泌であり、そこで着目されたのが西湖
であつた。李泌は、竹筒で西湖の水を城中に引いて六つの井
戸を作り、市民の生活用水として供したのである。

この李泌の治水事業を受け継いだのが、長慶二年(八二二)、
杭州刺史として赴任した白居易である。再び深刻な水問題に
直面していた杭州に赴任した白居易は、西湖の浚渫と堤防の
増強によって西湖の貯水量を増大させると共に、北の石函を
始めとする水門の整備・増設を圖り、灌漑用水の安定的且つ
効果的な供給體制を確立した。併せて、李泌の六井を重修
し、杭州城内に於ける生活用水の安定的に確保したのであ
る。

白居易が長慶四年(八二四)に杭州を去つてから五十年後、
僖宗の乾符二年(八七五)に黃巢の亂が勃發する。反亂軍は、
乾符五年(八七八)と廣明元年(八八〇)の二度にわたつて杭州
を攻撃したが、この危機を救つたのが、後に吳越國の初代國

王となった錢鏐である。唐王朝の末年である天祐四年（九〇七）、朱全忠から吳越國王に封ぜられた錢鏐は、杭州を首都と定め、杭州一帯の整備・開發を開始する。

吳越國は、錢鏐から數えて五代、七十餘年という短命の王朝ではあったが、政治・經濟兩面に於いて安定した豊かな國家であった。そうした安定を背景に、錢氏一族は、西湖の周圍に多くの佛教寺院・佛塔を建立したのである。その中には「雷峯塔」「保俶塔」など今日の西湖の風景を語る上で不可缺なランドマークも數多く含まれている。景勝地「西湖」の實質的な完成は、まさにこの吳越國時代に達成されたと言える。

以上、唐代に至る西湖の沿革について概観した。次に、こうした西湖の沿革を、詩歌の上に迎ってみる。

『西湖遊覽志』（卷一）の述べる如く、唐代以前の詩歌の中に杭州「西湖」を詠む作品を見出すことは、對象を西湖周邊の古跡に擴大しても、極めて困難である。⁽¹⁰⁾一方、唐代の詩歌に於いて、杭州・錢塘および杭州・錢塘に關わる名勝古跡を詠み込んだ詩は、多くの詩人たちによって數多く残されている。しかし、それらの詩にあって杭州「西湖」を題材として

詠み込んだ詩は、後に言及する白居易の作品を除けば、僅かな數しか残されていない。唐代の詩人たちは、總じて杭州「西湖」に對して無關心であつた。

では、詩人たちの眼は一體何に向けられていたのか。以下、具體的作品を通して檢證してみる。⁽¹¹⁾

靈隱寺

宋之間

鶯嶺鬱岩曉

鶯嶺鬱として岩曉たり

龍宮鎖寂寥

龍宮鎖されて寂寥たり

樓觀滄海日

樓には觀る滄海の日

門對浙江潮

門は對す浙江の潮

桂子月中落

桂子月中より落ち

天香雲外飄

天香雲外に飄る

捫蘿登塔遠

蘿を捫りて塔を登ること遠く

剝木取泉遙

木を剝りて泉を取ること遙かなり

霜薄花更發

霜は薄く花更に發き

冰輕葉未凋

冰は軽く葉未だ凋まず

夙齡尙退異

夙齡退異を尙び

搜對滌煩囂

搜對煩囂を滌ぐ

待入天台路

天台の路に入るを待ちて

看餘度石橋 餘が石橋を度るを看よ

〔『全唐詩』卷五三〕

宋之問は、則天武后に仕えた初唐の詩人である。この詩は、越州の長史に左遷された宋之問が、靈隱寺に遊んだ折りの作と言われる。杭州・錢塘の勝跡を詠んだ唐詩としては最も早期のものと言えるこの詩では、第三・四句に靈隱寺からの眺望が詠まれている。ここで注目すべきは、西湖の西方に位置する靈隱寺から東方に向けられた作者の視線が、遙か彼方の浙江（錢塘江）に注がれているという点である。こうした浙江（錢塘江）——より廣範圍に、「海」として捉えられたことも多い——への着目は、杭州・錢塘を詠んだ唐詩の多くに見受けられる。

與從姪杭州刺史良遊天竺寺

李白

挂席凌蓬丘 席を掛けて蓬丘を凌ぎ

觀濤憇樟樓 濤を觀て樟樓に憇う

三山動逸興 三山 逸興を動かし

五馬同遨遊 五馬 遨遊を同じうす

天竺森在眼 天竺 森として眼に在り

白居易の愛した風景（鎌田）

松風颯驚秋 松風 颯として秋に驚く

覽雲測變化 雲を覽て變化を測り

弄水窮清幽 水を弄して清幽を窮む

疊嶂隔遙海 疊嶂 遙海を隔て

當軒寫歸流 當軒 歸流を寫ぐ

詩成傲雲月 詩成りて雲月に傲り

佳趣滿吳洲 佳趣 吳洲に滿つ 〔『全唐詩』卷一七九〕

この詩は、開元二十七年（七三九）、李白が杭州刺史であった從姪の李良と天竺寺に遊んだ時の作とされる。先ず第一句で杭州の名勝として看潮の名所である樟樓（樟亭）が、第九・十句では天竺寺から眺望される海が描かれる一方、鄰接する西湖への言及は見られない。寺尾剛氏によれば、「宿命的な旅人」であった李白は、行く先々の名勝古跡を訪ねては「詩跡」を生み出していったという。その李白が、杭州を訪れながら西湖への言及を残していないということは、この時期に於ける西湖の景勝としての存在感を考える上で重要である。

旅次錢塘

方干

此地似鄉國 此地 鄉國に似

中國詩文論叢 第十七集

堪爲朝夕吟 朝夕の吟を爲すに堪ふ
 雲藏吳相廟 雲は藏す 吳相の廟
 樹引越山禽 樹は引く 越山の禽
 潮落海人散 潮落ちて 海人散じ
 鐘遲秋寺深 鐘遅れて 秋寺深し
 我來無舊識 我來たるも 舊識無し
 誰見寂寥心 誰か見ん 寂寥の心

〔全唐詩〕卷六四八)

晩唐の詩人である方干は、現在の浙江省紹興の南にあった鏡湖（別名、鑑湖）の畔に隱棲していたことで知られる。杭州に關わる詩も數多く残しているが、杭州・錢塘の景物としては、この詩の第五句にも表れる如く、浙江に言及するものが大半を占めている。例えば、錢塘の景勝を叙した「錢錢塘異勝」（651）が、「四郊遠火燒煙月、一道驚波撼郡城」と浙江に言及しながら、西湖への言及を飲いている點は、杭州の景勝に對する方干の認識を物語るものと言える。唯一西湖に言及する「贈錢塘湖上唐處士」（650）にあつても、「錢塘湖」は「唐處士」に關わる地理的説明に過ぎず、その景色については何ら描かれていない。⁽¹⁶⁾

浙江への着目は、さらにイメージのレベルでも確認される。

送陶十赴杭州攝掾 劉長卿
 莫歎江城一掾卑 歎く莫かれ 江城一掾の卑なるを
 滄洲未是阻心期 滄洲 未だ是れ心期を阻まず
 浙中山色千萬狀 浙中の山色 千萬の狀
 門外潮聲朝暮時 門外の潮聲 朝暮の時

〔全唐詩〕卷一五〇)

この詩では結句に浙江が詠まれているが、ここで詠まれる杭州の景色は、陶十の赴任先として劉長卿がイメージしたものである。杭州からの連想として浙江（錢塘江）を詠む例は、岑參の「送廬郎中除杭州赴任」（201）、權德輿の「送二十叔赴任餘杭尉」（323）、裴夷直の「寄杭州崔使君」（513）など他にも數多く存在している。即ち、唐代にあつて、杭州・錢塘から連想するイメージとしても、浙江（錢塘江）が一般性を獲得していたと言える。

このように、浙江（錢塘江）がことさらに着目された理由としては、浙江の大潮、いわゆる大海嘯の存在が第一に擧げられるであろう。「二丈有餘」に及ぶその波が、鬼神の所爲

として人々に畏れられていたことは、既に『水經注』(卷四十)に見えている。⁽¹⁸⁾ そもそも唐代に於ける杭州の郡の役所は鳳凰山の西麓に置かれており、しかも當時の錢塘江は鳳凰山に近い位置にあった。浙江の潮は、まさに「郡亭枕上看潮頭」⁽¹⁹⁾と詠まれる身近な存在であったのである。この夙に名高い浙江の大潮が、杭州・錢塘を訪れる人々の視線を海に向かわせたであろうことは想像に難くない。その結果、浙江(錢塘江)、さらには海は、杭州・錢塘を語るに際しての常套的景觀、また杭州以外の地にあつて杭州をイメージする際の重要な要件となつたのである。

次に、唐詩に詠まれた西湖について眺めてみる。既に述べた如く、西湖が本格的に整備され景勝としての原型を形成するのは、中唐から五代の吳越國にかけての時期である。これに呼應して、西湖を詠んだ唐詩の殆どは中・晩唐期にかけて詠まれているのだが、勿論西湖自體はそれ以前から存在していた。白居易の「錢塘湖石記」⁽²⁰⁾には「錢塘湖一名上湖、周迴三十里」と記されており、下湖をも含めた西湖の空間的な存在感は今日の西湖を遙かに凌ぐものであつたと想像される。

宿天竺寺

松柏亂巖口

山西微徑通

天開一峯見

宮闕生虛空

正殿倚霞壁

千樓標石叢

夜來猿鳥靜

鐘梵響雲中

岑翠映湖月

泉聲亂溪風

心超諸境外

了與懸解同

明發唯改視

朝日長崖東

湖色濃蕩漾

海光漸瞳朦

葛仙迹尙在

許氏道猶崇

獨往古來事

松柏は巖口に亂り^{わた}

山西に微徑通ず

天開きて一峯見はれ

宮闕 虛空を生ず

正殿は霞壁に倚り

千樓に標石叢まる

夜來 猿鳥靜かにして

鐘梵は雲中に響く

岑翠 湖月⁽²¹⁾に映じ泉聲 溪風に亂る^{みだ}

心は諸境の外に超え

了ひに懸解と同じうす

明發に唯だ改めて視るに

朝日は崖東に長し

湖色 濃やかに蕩漾し

海光 漸く瞳朦たり

葛仙の迹 尙お在り

許氏の道 猶お崇はる

獨往 古來の事

陶翰

幽懷期二公 幽懷 二公を期す (『全唐詩』卷一四六)

陶翰は開元十八年(七三〇)の進士であり、盛唐の詩人と見てよい。ここでは第十五・十六句に、細かに波立ちきらめく西湖の湖面が、朝日に輝く海との對比の上に具體的に描寫されている。同じく天竺寺を詠んだ先の李白の詩と比較した場合、陶翰と李白との西湖に對する捉え方の差異は、どこから生じたのか。

この點を考へる時、寺尾剛氏の「李白はある土地の風物を描く際、自らの個人的な狀況を語ることを押さえ、對象そのものに没入し、その土地を稱贊・美化することに徹する」という指摘は極めて意義深い。即ち、陶翰がその個人的體驗に基づいて天竺寺からの具體的「景觀」として西湖を描いたのに對して、李白は天竺寺を語るに相應しい普遍的な「風景」のみを選び取って天竺寺を描こうとしたのである。換言すれば、李白にとつての西湖は、天竺寺に關して言えば「個人的な狀況」でしかなかったことである。杭州・錢塘を詠んだ詩に於いて、李白が「西湖」を描かなかつたという事實は、同様の理由に據るものであろう。

なお、今回の調査の範圍では、陶翰のこの詩は西湖を詠ん

だ最も早期の唐詩であると同時に、この時期に西湖を詠んだ唯一の作品であつた。このことは、盛唐期にあつての西湖が、「個人的な狀況」としても詩人たちに十分に意識される存在ではなかつたことを物語るものと言へる。これが中唐以降になると、西湖自體が詩興の場として本格的に登場する。

錢塘湖春行

白居易

孤山寺北賈亭西

孤山寺の北 賈亭の西

水面初平雲腳低

水面初めて平らかなるも 雲腳低る

幾處早鶯爭暖樹

幾處の早鶯か 暖樹を争い

誰家新燕啄春泥

誰が家の新燕か 春泥を啄む

亂花漸欲迷人眼

亂花 漸く人眼を迷わさんと欲し

淺草纔能沒馬蹄

淺草 纔に能く馬蹄を沒す

最愛湖東行不足

最も愛す 湖東 行けども足らず

綠楊陰裏白沙堤

綠楊陰裏 白沙堤

(『全唐詩』卷四四三)

早春錢塘湖晚眺

張祜

落日下林坂 落日に 林の坂を下り

撫襟睇前蹤 襟を撫して前蹤を睇る

輕漸流迴浦 輕漸は迴れる浦に流れ

殘雪明高峯 殘雪は高峯に明かなり

仰視天宇曠 仰ぎて視る 天宇の曠なるを

俯登雲樹重 俯して登る 雲樹の重なるを

聊當問眞界 聊か當に眞界を問うべし

昨夜西齋鐘 昨夜 西齋の鐘 (『全唐詩』卷五一〇)

杭州刺史として西湖の治水に盡力した白居易は、先にも觸れたように西湖を詠んだ詩を數多く残しているが、この詩は杭州刺史であった長慶三年(八二三)の作とされる。⁽²³⁾白居易の西湖に對する思いは、後に檢證する如く、他の詩人たちとは一線を畫するところがあり、この詩でも尾聯にそうした白居易の西湖への傾倒ぶりの一端が窺える。

次の張祐は、もと姑蘇(蘇州)に寓居し、山水を愛し、各地の名寺を歴訪して多くの題詠を残している。よく知られる孤山寺を詠んだ詩を取り上げる。

題杭州孤山寺

樓臺聳碧岑 樓臺 碧岑に聳え

白居易の愛した風景(鎌田)

一徑入湖心 一徑 湖心に入る

不雨山長潤 雨ふらざるも 山長く潤い

無雲水自陰 雲無くも 水自ら陰る

斷橋荒蘚澀 斷橋に荒蘚澀とどろはり

空院落花深 空院に落花深し

猶憶西窗月 猶お憶う 西窗の月

鐘聲在北林 鐘聲 北林に在り (『全唐詩』卷五一〇)

多くの樓臺が並び建っていたと言われる孤山⁽²⁴⁾と、そこから湖心へと向かうひとすじの小徑。在りし日の孤山一帯の景色を彷彿させてくれる第一・二句には、景色を目の當たりにした者のみが描き得るリアリティーが感じられる。先の「早春錢塘湖晚眺」もそうであるが、張祐の西湖に對する態度は基本的に静的な寫實に徹しているように思われる。これに比較して、白居易の西湖に對する態度には、尾聯の「最愛」という直截的感情表現に端的に表れる如く、より動的な感情の投入が感じられる。そこには、在るがままの景色を受動的に感受することに止まらず、景色に能動的に關與せんとする意志が強く表れていると言つてよい。

ここまで、『全唐詩』に據って杭州・錢塘に關わる唐詩を
通覽してきたが、⁽²⁵⁾その結果をまとめておく。

杭州・錢塘に關わる詩は、唐代を通して數多く殘されてい
た。それらの詩には、浙江（錢塘江）が頻出し、とりわけ大
潮及びそれによって特徴付けられる「海」は、靈隱・天竺兩
寺を詠む詩に於いても頻出するなど、杭州・錢塘を語る常套
的景觀として、イメージのレベルに於ても普遍化・一般化さ
れていた。

これに對して杭州「西湖」は、ある程度まとまって唐詩に
詠まれるようになるのは、整備が進んだ中唐以降のことであ
る。とはいえ、西湖の景色を詠み込んだ詩を殘している詩人
は、既に取り上げた陶翰・白居易・張祐の他に、權德輿・元
稹・許渾・馬戴・李郢・方干・羅隱・沈韜文・齊己の計十二
人（『全唐詩』の所收順）に過ぎない。興味深いことに、これら
の詩人は、いずれも杭州・錢塘に住居もしくは訪問の經驗を
有している。そうした詩人たちにのみ西湖への言及が存在し
ているということは、唐代の西湖がそれだけ地元密着の限定
的な存在でしかなかったということである。しかも、西湖を
モチーフとする作品⁽²⁶⁾としては、白居易以外の詩人にある
は、張祐「早春錢塘湖晚眺」(510)・李郢「冬至後西湖泛舟看

斷冰偶成長句」(590)・方干「贈錢塘湖上唐處士」(650)・沈韜
文「游西湖」(763)の四首を數えるのみである。

これらの事實からすれば、唐代の杭州「西湖」は、杭州・
錢塘の景勝として、未だ詩人たちに認知される存在ではな
かったと結論付けることが出来る。殆どの唐代詩人たちにとっ
て、西湖の整備が進んだ中唐以降にあっても、杭州・錢塘の
景勝地と言えば依然として「浙江の大潮」であった。

(三) 白居易にとつての西湖

既に見てきた如く、杭州「西湖」は、詩歌の題材としては
多分に地域限定的な存在でしかなかった。西湖（錢塘湖）を
杭州・錢塘の景勝と捉える認識は、唐代詩人たちの間で共有
されるものではなかったのである。ところが、白居易に關し
て言えば、その詩に表れる杭州「西湖」に對する認識は、唐
代詩人一般の西湖に對する共通認識を大きく逸脱していた。

餘杭形勝

餘杭形勝四方無

餘杭の形勝 四方に無く

州傍青山縣枕湖

州は青山に傍い 縣は湖に枕む⁽²⁷⁾

遶郭荷花三十里

郭を遶る荷花 三十里

拂城松樹一千株

城を拂う松樹 一千株

夢兒亭古傳名謝

夢兒亭 古より傳へて謝と名づけ

教妓樓新道姓蘇

教妓樓 新たに道ひて蘇を姓とす

獨有使君年太老

獨り使君の年太だ老い

風光不稱白髭鬢

風光 白髭鬢に稱はざる有り

〔全唐詩〕卷四四三

長慶二年（八二二）の十月、五十一歳の白居易は杭州に刺史

として赴任するが、この詩は翌長慶三年の初夏の作。赴任後

僅か半年で、既に白居易が餘杭（杭州）⁽²⁸⁾の景色に魅了されて

いる様子が窺える。この詩で白居易は、先ず首聯で餘杭の山

水が天下無雙であることを言い、續く頷聯で、その「山水」

の内容を具體的に明らかにする。白居易にとっての天下無雙

の「餘杭の景勝」とは、他でもない西湖の景色であった。

白居易の西湖に對する思いは、西湖自體をモチーフとする

詩に最も端的に表れる。

春題湖上

湖上春來似畫圖

湖上 春來たれば 畫圖に似たり

亂峯圍繞水平鋪

亂峯圍繞して 水平らかに鋪く

白居易の愛した風景（鎌田）

松排山面千重翠

松は山面に千重の翠を排し

月點波心一顆珠

月は波心に一顆の珠を點ず

碧毯線頭抽早稻

碧毯の線頭 早稻を抜き

青羅裙帶展新蒲

青羅の裙帶 新蒲を展ぶ

未能拋得杭州去

未だ杭州を抛ち得て去る能はず

一半句留是此湖

一半 句留するは 是れ此の湖

〔全唐詩〕卷四四六

冒頭で白居易は、西湖の景色を「繪のようだ」と稱賛して

いるが、その實、この詩に描かれた西湖の景色は、まさに西

湖の美のエッセンスの集約——「風景」⁽²⁹⁾——であり、白居易

によって描かれた西湖の「風景畫」であったと言える。⁽³⁰⁾この

詩を読む者は、さながら一幅の山水畫を見るが如く、白居易

の愛した西湖の「風景」を眼前に髣髴することが出来るので

ある。また、西湖に對する愛着を尾聯に於いて直叙するとい

う結構は、先の「錢塘湖春行」と同様である。しかし、この

詩では、さらに西湖に對する愛着を西湖それ自體に起因させ

るという主—客轉換の擬人法が導入され、白居易と西湖との

より親密な關係——相思相愛——が語られる。この詩が長慶

四年、即ち刺史の任期が満ちる年の作である點を考えると、

白居易の西湖に對する心情の深化が窺える。

次に、孤山寺を中心に西湖を詠んだ詩を取り上げる。

西湖晚歸回望孤山寺贈諸客

柳湖松島蓮花寺 柳湖 松島 蓮花寺

晚動歸橈出道場 晚に歸橈を動かして道場を出づ

盧橋子低山雨重 盧橋 子低れて 山雨重く

棕櫚葉戰水風涼 棕櫚 葉戰まぎて 水風涼し

煙波澹蕩搖空碧 煙波 澹蕩として空碧を揺らし

樓殿參差倚夕陽 樓殿 參差として夕陽に倚る

到岸請君回首望 岸に到りて 君に首を回らして望ま

蓬萊宮在海中央 蓬萊宮は海の中央に在り

〔全唐詩〕卷四四三

冒頭、白居易は三つの名詞を無造作に並べることで、西湖

の孤山一帶の景色を鮮やかに描き出す。それに續けて頷聯・

頸聯で具體的な景色の描寫を展開した後、最後に白居易は、

孤山を東海に浮かぶ仙宮である蓬萊宮に見立てることを讀み
手——この場合は諸客——に求める。ここで白居易は、西湖

の實景の一部を切り取り傳統的な神仙山水のイメージに重ね
合わせることで、文化的なレベルで構造化された一つの「風
景」を自ら創り上げ、提示しているのである。

白居易の西湖に對する愛情は、杭州を離れるに當たって最
高潮に達する。

西湖留別

征途行色慘風煙 征途の行色 風煙慘たり

祖帳離聲咽管弦 祖帳の離聲 管弦咽むせぶ

翠黛不須留五馬 翠黛は須ひず 五馬を留むるを

皇恩只許住三年 皇恩は只だ許す 三年を住するを

綠藤陰下鋪歌席 綠藤陰下 歌席を鋪き

紅藕花中泊妓船 紅藕花中 妓船を泊す

處處回頭盡堪戀 處處 頭を回らせば 盡く戀うるに
堪へたり

就中難別是湖邊 就中 別れ難きは 是れ湖邊

〔全唐詩〕卷四四六

長慶四年の五月、杭州を去るに當たっての作である。この
詩の特異さは、同様の狀況下で詠まれた次の詩との對比によ

つて一層鮮明になる。

別杭州

醉與江濤別 醉ひて江濤と別れんとするに

江濤惜我遊 江濤 我が遊を惜しむ

他年婚嫁了 他年 婚嫁了はれば

終老此江頭 終に此の江頭に老いん

〔全唐詩〕卷四九六

姚合

姚合は、白居易にやや遅れて刺史として杭州に赴任する。⁽³²⁾

在任中、天竺寺を始めとする杭州の名勝古跡を訪ね歩き多くの詩を残しているが、西湖に言及する詩は一首も残されていない。この詩に於いても、姚合にとつての杭州は、やはり

「江濤」——浙江の大潮——によつて語られるものであった。

しかも、姚合の場合、杭州との別れを殊更に惜しんでいる様子は見られない。姚合と杭州との別れがそうであつたように、政治状況の變化による南船北馬の官僚生活を餘儀なくさされていた唐代詩人たちにとつて、赴任地との別れは、日常茶飯事に屬する出来事であつたのだから。それだけに、敢えて「西湖」への「留別」という形で表明された白居易の杭州、

白居易の愛した風景(鎌田)

就中西湖への執着は、特異なものに思われる。しかも、白居易が刺史として實際に杭州の地にあつたのは、長慶二年十月から長慶四年五月末にかけての、二年にも満たない期間であつた。

西湖への斷ち切れぬ思いは、杭州を離れた後も白居易の胸中に去來する。杭州から洛陽に向かう途中で詠まれた詩を取り上げる。

杭州迴舫

自別錢塘山水後 錢塘の山水に別れてより後

不多飲酒懶吟詩 多くは酒を飲まず詩を吟ずるに懶し

欲將此意憑迴權 此の意を將て迴權に憑み

報與西湖風月知 與に西湖の風月に報じて知らしめん

と欲す 〔全唐詩〕卷四九六

ここで歌われるのは、さながら最愛の人との別れに際して湧き上がる、連綿たる思慕の情である。白居易と西湖との關係は、こうした感情を介在させるものであつた。

杭州を去つて一年経つた敬宗の寶曆元年(八二五)、白居易は杭州に鄰接する蘇州の刺史として赴任するが、その任地で

の作を取り上げる。

答客問杭州

爲我踟躕停酒盞
與君約略說杭州
山名天竺堆青黛
湖號錢塘瀉綠油
大屋簷多裝雁齒
小航船亦畫龍頭
所嗟水路無三百
官繫何因得再遊

我が爲に踟躕して酒盞を停めよ
君が與に約略して杭州を説かん
山は天竺と名づけて 青黛うづたか堆く
湖は錢塘と號して 綠油を瀉ぐ
大屋 簷多くして雁齒を装ひ
小航 船亦た龍頭を畫く
嗟く所は 水路三百無きも
官に繫がれて何に因りてか再び遊ぶ
を得ん

〔全唐詩〕卷四四七

杭州について問われた白居易は、早速杭州の名勝を紹介する。白居易にとって、杭州の景勝地は西湖以外には考えられず、天竺山に配すべきは、浙江や蒼海ではなく、飽くまでも西湖でなくてはならなかった。杭州を去って以來、既に一年以上経過しているにも関わらず、白居易の西湖に對する思慕の情は一向に減じてはいない。尾聯は、そうした白居易の思いを如實に物語っている。

以上、白居易詩に表れる杭州「西湖」に對する特別な感情について檢證してきたが、こうした感情は、他の唐代詩人には決して見られないものであった。それに加えて、白居易の杭州「西湖」に對する傾倒は、量的にも他の詩人に突出している。

例えば、杭州「西湖」をモチーフとする詩に關して言えば、白居易以外の詩人では四首を數えるのみであるのに對して、白居易にあつては「錢塘湖春行」・「西湖晚歸回望孤山寺贈諸客」・「湖中自照」・「湖亭晚歸」・「湖上夜飲」・「湖上招客送春汎舟」・「湖上醉中代諸妓寄嚴郎中」(以上、43)・「早春西湖閒遊悵然興懷憶與徵之同賞因思在越官重事殷鏡湖之遊或恐未暇偶成十八韻寄徵之」(44)・「春題湖上」(44)・「西湖留別」(44)の十首を數える。

また、杭州「西湖」に言及する詩は約三十首が確認されるが、管見の限り、これは他の唐代詩人が杭州「西湖」に言及する詩の總數の二倍に相當する。しかも、杭州「西湖」に言及する白居易詩は、長安から杭州へ向かう途中で作られた「舟中晚起」(43)に「且向錢塘湖上去、冷吟閒醉二三年」とあるのを初出として、すべて杭州赴任以降に作られている。

これら「西湖」に關わる白居易詩の作詩狀況からすれば、白居易の杭州「西湖」に對する特別な感情は、二年にも満たない白居易の杭州體驗の間に集約的に培われたと言ふことが出来る。

なお、白居易と杭州との關係については、從來、杭州を特別視する感情が杭州赴任以前の白居易に既にあつたとする指摘がなされてきた。⁽³⁴⁾しかし、例えば白居易詩に見える六十六例（五十一首）の「杭州」を、その作成時期によつて分類すると、杭州赴任途中時の用例が六例（五首）、杭州赴任時の用例が二十二例（十七首）、杭州離任以降の用例が三十八例（二十九首）となり、杭州赴任以前の用例は見當たらぬ。白居易にとつての「杭州」が、杭州刺史時代の體驗と不可分の關係にあつたことが確認されよう。しかも従來の指摘が據り所とする白居易詩の「杭州」への言及は、すべてこの「杭州刺史時代の體驗」というフィルターを通過したものと云え、白居易と杭州との關係の本質を解明する材料としては適切を缺くと言わざるを得ない。⁽³⁵⁾

即ち、杭州刺史赴任という體驗こそが、白居易と杭州——より具體的には「西湖」——との關係を生み出したのである。そして、白居易の杭州「西湖」に對する特別な感情の形

白居易の愛した風景（鎌田）

成に深く關わるこの關係を、ここでは「トポフィリア」といふ概念で捉えることとする。⁽³⁶⁾

「トポフィリア」は、「物質的環境と人間との情緒的なつながり」⁽³⁷⁾を總合的に捉える概念であるが、ここで言う「物理的環境と人間」との關係は、個人の身體的經驗を通して構築されると同時に、その個人が屬する文化的・社會的・スペースタイプに沿う方向に營まれるものである。この二重性は、古典中國世界の士大夫に關して言えば、詩人（環境の表現者としての個人）であり官僚（環境に對する文化の執行者の一人）でもあるという兩義的性格に置き換えることが出来る。

やはり一士大夫として古典中國世界に生きた白居易についても、その兩義的性格を統括的に把握することが、白居易の杭州「西湖」體驗の本質を明らかにする上で必要不可欠である。「トポフィリア」は、そうした總合的視點を與えてくれる。そしてこの「トポフィリア」こそが、「春題湖上」や「西湖晚歸回望孤山寺贈諸客」など、西湖を詠んだ數々の名作を生み出した原動力だったのである。

(四) 西湖へのトポフィリア——その源泉に位置するもの——

トポフィリアとは、ある空間が審美的な評價によって分節化された「場所」に生じるものである。そこでイーファー・トゥアン氏は、環境への関わり方に於ける「來訪者」の立場に着目し、「來訪者による環境の評価は、本質的に審美的なものである」とする。まさに「來訪者」であった白居易は、杭州住民にとって生活用水の供給源でしかなかった西湖を、新たな美的「風景」として分節化した最初の詩人であった。

しかし、「來訪者」として杭州を訪れた詩人は、決して白居易一人ではなかった。にもかかわらず、白居易だけが「トポフィリア」を生み出し得たのには、杭州赴任の経緯が深く関わっていたと言える。

杭州赴任に先立つ長慶元年(八二二)、白居易は中書舎人の地位を授けられる。江州・忠州と続く約六年にも及ぶ外任の末、正五品の官位とはいえ、待ち望んでいたエリート官僚への復歸であった。しかし、朝廷内の状況は白居易がこの地位に安んずることを許さず、僅か一年足らずで白居易は杭州刺史としての轉出を餘儀なくされるのである。⁽³⁸⁾

この白居易の杭州赴任については、「彼自身の希望による」轉出であったのか、それとも貶謫であったのかという問題が従来より議論されてきた。この問題に關して、芳村弘道氏がその論文の中で、白居易自らが外任を求めた結果とする説に對して詳細な反論を展開されている。⁽⁴⁰⁾ 正史が外任志願説を採る以上、「左遷」と即断するには慎重にならざるを得ないものの、長安から杭州に至る途上で詠まれた約四十首に及ぶ白居易詩を見る限り、白居易自身はこの杭州刺史轉出を明らかに「左遷」と受け止めていたと思われる。

「左遷」の意識を有する例を挙げる。

桐樹館重題

階前下馬時	階前	馬を下るの時
梁上題詩處	梁上	詩を題するの處
慘澹病使君	慘澹たり	病使君
蕭疏老松樹	蕭疏たり	老松樹
自嗟還自晒	自ら嗟き	還た自ら晒ふ
又向杭州去	又た杭州に向ひて	去らんことを

〔『全唐詩』卷四三二〕

「ここで「重題」というのは、次の詩に詠まれた状況を踏まえる。⁽⁴²⁾

商山路驛桐樹昔與微之前後題名處

與君前後多遷謫 君と前後多く遷謫せられ

五度經過此路隅 五度經過す 此の路隅

笑問中庭老桐樹 笑ひて問ふ 中庭の老桐樹

這回歸去免來無 這の回歸り去らば 來たるを免るる

や無や いなか (『全唐詩』卷四四一)

この詩は、忠州から長安に戻る途中、商山路に於いて詠まれた作品である。元稹共々、かつて貶謫の度にここを通った白居易は、これが最後の貶謫であろうかと桐樹に笑いながら問いかけた。「桐樹館重題」の末尾一句は、この問いかけを踏まえて、はからずも、またこの地を経過して杭州へ赴任する——貶せられる——こととなってしまった、という嘆き・自嘲を詠んだものである。

初出城留別

朝從紫禁歸 朝に紫禁より歸り

白居易の愛した風景(鎌田)

暮出青門去 暮に青門を出て去る

勿言城東陌 言ふ勿かれ 城東の陌

便是江南路 便是是れ 江南の路

揚鞭簇車馬 鞭を揚て 車馬の簇むがり

揮手辭親故 手を揮ひて 親故に辭す

我生本無鄉 我が生 本より郷無し

心安是歸處 心安きは 是れ歸る處

(『全唐詩』卷四三二)

長安を發つに當つたて詠まれたこの詩の尾聯は、江州司馬時代に白居易が詠んだ名句、「心泰身寧是歸處、故郷何獨在長安」(『香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁』⁽⁴³⁾ 439)に通じるものである。江州にあって白居易が到達した人生哲學——いかなる状況下でも自己を見失わずに生きて行く——を自らに言い聞かせる旅立ちには、今回の杭州赴任が、かつての江州左遷と同じ状況であることを意味するものと言えよう。

なお、杭州赴任途中の作には、例えば「初下漢江舟中作寄兩省給舍」(431)に「葦年庶報政、三年當退身／終使滄浪水、濯吾纓上塵」とある如く、今回の杭州赴任を樂觀視する發言も幾つか見られる。⁽⁴⁵⁾しかし、同時に「左遷」を強く意識した

發言が複数存在している事實からすれば、これも、所與の狀況に心身をうまく適合させようとする白居易自身の人生哲學の表れと考えるべきであろう。

これらの例からも、白居易の杭州刺史轉出は、少なくとも白居易自身にとって、「左遷」と意識されていたことが確認される。

後に「三年閑悶在餘杭」(「憶杭州梅花因鈸舊遊寄蕭協律」⁴⁴⁶)と同想される如く、杭州刺史への轉出は、白居易にとって「左遷」苦惱を伴うはずのものであった。ところが、杭州赴任時代に作られた一五〇首にも及ぶ作品を通覽してみると、「左遷」の苦惱が表だって姿を現すことはなく、むしろ杭州刺史の境遇に満足していた様子すら窺える。⁽⁴⁴⁷⁾

郡亭

平旦起視事 平旦 起きて事を視

亭午臥掩關 亭午 臥して關を掩ふ

除親簿領外 親しく簿領するを除く外は

多在琴書前 多く琴書の前に在り

况有虛白亭 況んや 虛白亭の有りて

坐見海門山

坐して海門山を見るをや

潮來一凭檻

潮來りて 一たび檻に凭り

賓至一開筵

賓至りて 一たび筵を開く

終朝對雲水

終朝 雲水に對し

有時聽管弦

有時 管弦を聽く

持此聊過日

此を持して聊か日を過せば

非忙亦非閑

忙に非ず 亦た閑に非ず

山林太寂寞

山林 太だ寂寞

朝闕空喧煩

朝闕 空しく喧煩

唯茲郡閣內

唯だ茲の郡閣の内

鸞靜得中間

鸞靜の中間を得たり

(『全唐詩』卷四三二)

全編を通して描かれる郡の役所での穩やかな生活ぶりに、「左遷」による苦惱は窺えない。末句の「中間」という言葉は、後の「中隱」に通じるものと指摘されるが、杭州に赴任して間もない作であるにも関わらず、白居易は杭州に安住の場を見つけたかの如くである。

酬周協律

五十錢唐守 五十錢唐の守

應爲送老官 應に老を送るの官と爲すべし

濫蒙辭客愛 濫りに辭客の愛を蒙りて

猶作近臣看 猶ほ近臣の看を作す

擊落愁須飲 擊落 愁へて須らく飲むべく

琵琶悶遣彈 琵琶 悶えて彈せしむ

白頭雖強醉 白頭 強ひて酔ふと雖も

不似少年歡 少年の歡に似ず (『全唐詩』卷四四六)

かつてのような感興を抱けない年老いた我が身を嘆きながらも、この詩に現狀に對する不滿は感じられない。特に首聯は、先にも言及した「香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」の、「匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官」という言葉を想起させるが、江州時代同様、ここでも白居易は、所與の狀況に對して積極的に適應してゆこうとする。このような生き様——人生哲學の實踐——こそが、人生に於けるジャイロスコープとして、白居易の心の平穩さを支えていたのである。所與の狀況に對する適應は、白居易を取り巻く自然環境にも向けられる。

白居易の愛した風景 (鎌田)

初領郡政衙退登東樓作⁽⁴⁹⁾

鯨惇心所念 鯨惇 心に念ふ所

簡牘手自操 簡牘 手に自ら操る

何言符竹貴 何ぞ言はん 符竹の貴きを

未免州懸勞 未だ免れず 州懸の勞を

賴是餘杭郡 賴さいはひに是れ餘杭郡

臺榭繞官曹 臺榭 官曹を繞る

凌晨親政事 晨を凌ぎて政事を親くし

向晚恣遊遨 晚に向ひて遊遨を恣にす

山冷微有雪 山冷かにして微に雪有り

波平未生濤 波平かにして未だ濤を生ぜず

水心如鏡面 水心 鏡面の如く

千里無纖毫 千里 纖毫無し

直下江最闊 直下の江は最も闊く

近東樓更高 近東の樓は更に高し

煩襟與滯念 煩襟と滯念とは

一望皆遁逃 一望すれば皆な遁逃せん (『全唐詩』卷四三二)

杭州に赴任したばかりの白居易にとって、政務の苦勞はあ

中國詩文論叢 第十七集

るものの、郡の役所は、杭州の景色を満喫するには好都合な立地条件にあった。仕事が退けるや、白居易は役所の東鄰にある樓臺に登り、杭州を一望する。第十五・十六句に詠まれる如く、それは眼前に廣がる景色の中に自身の煩悶——「左遷」の苦惱——を遁逃させんがために他ならなかつた。

この「東樓」からの一望に始まる杭州の景色への傾倒は、白居易の杭州刺史在任中を通してその度合いを深めて行く。杭州を去るに當たつて、白居易は同じ「東樓」に於いて次のように詠んでいる。

重題別東樓

東樓勝事我偏知

氣象多隨昏且移

湖卷衣裳白重疊

山張屏障綠參差

海仙樓塔晴方出

江女笙簫夜始吹

春雨星攢尋蟹火

秋風霞颭弄濤旗

宴宜雲髻新梳後

東樓の勝事 我れ偏に知る

氣象多く昏且に隨ひて移る

湖は衣裳を卷きて白重疊

山は屏障を張りて綠參差

海仙の樓塔 晴れて方に出で

江女の笙簫 夜に始めて吹く

春雨に星攢まる 蟹を尋ぬるの火

秋風に霞颭へる 濤を弄するの旗

宴は雲髻の新たに梳るの後に宜しく

曲愛霓裳未拍時 曲は霓裳の未だ拍たざる時を愛す
太守三年嘲不盡 太守 三年嘲けりて盡さず
郡齋空作百篇詩 郡齋 空しく作る百篇の詩

〔全唐詩〕卷四四六

先にも示した如く、杭州刺史時代に白居易が詠んだ詩は一五〇首に及ぶが、白居易の言葉を文字通りとすれば、その三分の二までもが杭州の景勝の吟詠に費やされたことになる。白居易の杭州時代は、杭州の景色に傾倒する日々であつたと言つてよい。白居易は、日々杭州の景色を體驗し、そしてそれを詩に詠むことで、内なる煩悶を拂拭し、心の平穩を得ていたのである。更に、ここで注目すべきは、先の「初領郡政衙退登東樓作」には見えなかつた「西湖」の景色が、第三句に採り上げられていることである。「西湖」こそは、白居易が杭州の景色の中で發見した、言わば杭州の「風景」の集大成であつた。

白居易が杭州に着任した翌長慶三年、元稹が浙東觀察使・越州刺史として越州に赴任する。この時期二人の間では多くの詩の贈答が行われるが、その中に互いの任地の名勝を競い合うやりとりがあつた。

酬微之誇鏡湖

我嗟身老歲方徂

君更官高興轉孤

軍門郡閣曾聞否

禹穴耶溪得到無

酒盞省陪波卷白

散盤思共彩呼盧

一泓鏡水誰能羨

自有胸中萬頃湖

我は身老いて歳の方に徂くを嗟き

君は更に官高くて興轉た孤なり

軍門郡閣 曾て聞なりや否や

禹空耶溪 到るを得しや無や

酒盞は省く 波の白を巻くに陪する

を

散盤は思ふ 彩の盧を呼ぶを共にせ

んことを

一泓の鏡水 誰か能く羨やまん

自ら胸中萬頃の湖有り

〔全唐詩〕卷四四六

この詩が作られた経緯については、白居易の自注に「微之詩云。孫園虎寺隨宜看、不必遙遙羨鏡湖。故此戲言答之」とある。「微之詩」とは、元稹の「寄樂天」（初句「閒夜思君坐到明」）（417）に白居易が答えた「答微之詠懷見寄」（446）に對して、更に元稹が應じた「戲贈樂天復言」（447）を指す。親友同士の他愛もない戯れの贈答ではあったが、そうした中にも

白居易の愛した風景（鎌田）

白居易の「西湖」に對する並々なぬ思い入れが窺える。また、「答微之見寄」（446）に於いては、「錢湖不羨若耶溪」と、會稽の名勝である若耶溪に對して「西湖（錢塘湖）」を誇って見せるのだが、これも「鏡湖」に對する「西湖」の優越を主張するものであろう。⁽⁵¹⁾

越州の名勝として夙に名高い鏡湖（鑑湖）については、西湖を詠むことの無かった李白も含め、多くの唐代詩人たちがその景色を詠んでいる。實態からすれば、西湖は鏡湖に比すべきも無かったが、白居易の中にあつてはその立場は逆轉していたのである。「周迴三十里」（錢塘湖石記）の西湖を、「周迴三百一十里」（元和郡縣圖志）卷二十六の鏡湖に對して「萬頃湖」と言えるのは、白居易の胸の内に於いてのみ可能なことであつた。

數ある杭州の景色の中で、白居易との間でこのような情緒的な繋がり——トポフィリア——を成し得た景色は「西湖」以外に存在しない。「左遷」の煩悶を杭州の景色の中に解消しようとした白居易は、その人生哲學の實踐を通して、「癒しの風景」としての「西湖」を發見したのである。白居易詩に詠まれた西湖の美しい「風景」の數々は、西湖に對する白居易のトポフィリアが「可視性」⁽⁵³⁾をが賦與されたものと言える。

(五) 結語

杭州「西湖」は、杭州に左遷された白居易が、その人生哲學の實踐の中で見出した「癒しの風景」であった。白居易詩に表れた杭州「西湖」へのトポフィリアは、そうした白居易の杭州體驗の中で生み出されたものである。この「西湖」の治水事業に白居易がひとかたならぬ情熱を注いだのは、士大夫としての「兼濟」の思いもさることながら、實態としての「西湖」を、少しでも自分の思い描く「風景」に近づける意圖があったのかも知れない。實態としての「西湖」が、杭州の景勝地として完成するのは、白居易が杭州を去って後百年を経てのことである。

〔注〕

- (1) 『宋元方志叢刊』(中華書局 一九九〇) 所收。
 (2) 『大明一統志』(三秦出版社 一九九〇)
 (3) 『西湖遊覽志』(中國文學參考資料叢書)(上海古籍出版社 一九八〇)
 (4) 『蘇軾文集』卷十一(中華書局 一九八六)
 (5) イーファー・トゥアン氏の著作としては、
 『空間の經驗——身體から都市へ——』(ちくま學藝文庫 一九九三)
 『トポフィリア——人間と環境——』(せりか書房 一九九二)
 の二書より多くの示唆を得た。
 (6) 本論攷は、『日中藝術研究』(総36期 一九九八・八) 所收の「詩が生み出した風景——杭州西湖(前編)」に於いて、後日の分析課題として提示した「白居易が西湖に傾倒せねばならなかった理由」(四〇頁)を論じるものである。なお、本論攷中、『日中藝術研究』所收の論文と基本的な論證の共通する(二)「唐代の西湖」および(三)「白居易にとつての西湖」に關しては、主として『日中藝術研究』所收論文の内容を改編してまとめている。兩論文の内で内容に重複があるのは、このためである。
 (7) 杭州「西湖」の沿革を述べるに當たって参照した文献のうち、主なものを示す。
 『杭州遊覽手冊』(浙江人民出版社 一九七九)
 『杭州與西湖史話』(上海人文出版社 一九八〇)
 『杭州辭典』(浙江人文出版社 一九九三)
 『南北朝前古杭州』(杭州歴史叢編之二)(浙江人民出版社 一九九七)
 『隋唐名郡杭州』(杭州歴史叢編之二)(浙江人民出版社 一九九七)
 『吳越首府杭州』(杭州歴史叢編之三)(浙江人民出版社 一九九七)

九八八)

『蘇州・杭州物語』村上哲見「中國の都城4」(集英社 一九八七)

『西湖案内 中國庭園論序説』大室幹雄(岩波書店 一九八五)

(8) 「唐」の字は、唐代には王朝の名を避けて「塘」に改められた。

(9) 『太平御覽』卷一七〇(中華書局 一九六〇)所收。

(10) 『先秦漢魏晉南北朝詩』遼欽立輯校(中華書局 一九八三)に據って調査した結果、「西湖(錢塘湖)」を詠んだ作品は、西湖一帯の景勝である武林山(靈隱・天竺)・孤山などを詠んだ作品も含めて發見できなかった。また、文章に關しても、『全上古三代秦漢六朝文篇名目錄及作者索引』(中華書局 一九八六)による篇名のみの調査ではあるが、やはり杭州西湖一帯に言及する作品は發見できなかった。

(11) 通覽・比較検討の便から、テキストは『全唐詩』(二十五冊本)(中華書局 一九六〇)に統一した。

(12) 『新唐書』(卷二〇二)の宋之問傳に、「(宋之問)下遷汴州長吏、未行、改越州長吏。頗自力爲政、窮歷剡溪山、置酒賦詩、流布京師、人人傳誦」とある。また、孟榮『本事詩』(徵異第五)には、江南に流された宋之問が靈隱寺に遊んだ折、「鷲嶺鬱岩曉、龍宮鎖寂寥」に續ける句に悩んでいたところ、老僧から「樓觀滄海日、門對浙江潮」の句を得て詩

白居易の愛した風景(鎌田)

を完成させたが、その老僧が實は駱賓王であったという話が載せられている。なお、例えば李攀龍『唐詩選』(卷四)など、この詩を駱賓王の作とする説も存在している。

(13) 安旗主編『李白全集編年注釋』(巴蜀書社出版 一九九〇)に據る。

(14) 『しにか 特集詩仙・李白』(第六卷 第六號 大修館書店 一九九五)所收「李白」と「詩跡」。なお、同論では李白と「詩跡(詩的古跡)」との關係が簡潔にまとめられており、關連する論文も紹介されている。

(15) 詩題に付した數字は、『全唐詩』に於ける所收卷數を示す。以下、同様。

(16) 參考までに詩の全文を示す。

我愛君家似洞庭、衝灣潑岸夜波聲。蟾蜍影裏清吟苦、舴舺舟中白髮生。常共酒杯爲伴侶、復聞紗帽見公卿。莫言舉世無知己、自有孤雲(一作煙霞)識此情。

(17) それぞれの詩に描かれた浙江(錢塘江)を示せば、「城底濤聲震、樓端鬢氣孤」(岑參「送廬郎中除杭州赴任」)、「春草吳門綠、秋濤浙水深」(權德輿「送二十叔赴任餘杭尉」)、「三年不見塵中事、滿眼江濤送雪山」(裴夷直「寄杭州崔使君」)となる。なお、作者と杭州との位置關係が明確である点から、ここでは送別詩・寄贈詩のみを取り上げた。

(18) 王國維校『水經注校』(上海人民出版社 一九八四)に、「濤水晝夜再來、來應時刻、常以月晦及望尤大、至二月八日

中國詩文論叢 第十七集

最高、峨峨二丈有餘、《吳越春秋》以爲子胥（文種之神）也。」とある。

- (19) 白居易「憶江南詞三首 其二」(458)
- (20) 朱金城箋校『白居易集箋校』(中國古典文學叢書) (上海古籍出版社 一九八八) 卷第六十八
- (21) 「湖」字について、『全唐詩』は「一作明」と注する。
- (22) 前出「李白と『詩跡』」
- (23) 白居易詩の作成年については、前出『白居易集箋校』に據る。
- (24) 前出『西湖遊覽志』(卷二)に、「孤山(中畧)唐、宋間、樓閣參差、彌布椒麓。」とある。
- (25) 『全唐詩』の通覽に當たつて、詩題の通覽には『唐代の詩篇』(一・二)、『唐代研究のしおり』(第十一・第十二) (同朋社出版 一九八五)を用いた。また、個々の作品の通覽には『全唐詩索引』(中華書局、現代出版社)を用い、『全唐詩索引』の存在しない詩人については『全唐詩』の該當箇所をそれぞれ個別に當つた。
- (26) ここでは、詩題に杭州西湖(錢塘湖)を詠み込む詩を指すものとす。
- (27) 但し、初句を缺く。
- (28) 「餘杭」は杭州の古名。『讀史方輿紀要』(卷九十)に、「陳置錢唐郡。隋平陳、廢郡置杭州。煬帝大業三年、改曰、餘杭郡。唐復爲杭州。」とある。
- (29) 「風景」については、小川環樹氏が「中國の文學における風景の意義」(『風と雲』朝日新聞社 一九七二)の中で、中唐期に於ける「scenery」としての「(風)景」の確立を指摘されている。本論で言う所の「風景」とは、そうした「ながめられた物」(小川、五四頁)にとどまらず、「眺める」という動作とその結果をも含んだ概念を指す。オギュスタン・ベルク氏の定義を借りるならば、「何らかの個人的(肉體的ないし心理的)體驗で結ばれていなければならない」(一九八頁)「個別的ないし集團的主體の空間および自然に對する關係の感覺的な表現」(一九二頁)と言えるものである(『風土の日本』篠田勝英譯 ちくま學藝文庫 一九九二)。イー・フリー・トゥアン氏の「トポフィア」との關係で言えば、人閒(主體)によつて審美的な價値を與えられた「場所」の表現、と説明できる。なお、ここで言う「場所」については、小松和彦氏の「『場所』とは空間ないし環境の中心であり、それゆえ、空間から切り取られ圍い込まれたところである」(前出「空間の經驗」文庫版解説)という解説が要を得ている。
- (30) 白居易詩の繪畫性に關しては、澤崎久和氏に「白居易と繪畫」(『福井大學教育學部紀要』第一節 人文科學 第40號 一九九一)などの論考がある。
- (31) 新藤武弘『山水がとは何か』[Fukutake Books] (福武書店 一九八九)の第一章參照。また、小尾郊一『中國文學に

現われた自然と自然觀」(岩波書店 一九六二)の第一章參照。

(32) 白居易に「送姚杭州赴任因思舊遊二首」(455)があり、『白居易集箋校』は大和九年(八三五)の作とする。

(33) 例えば「天竺寺殿前立石」(499)、「杭州觀潮」(499)、「遊謝公亭」(500)など。

(34) 花房英樹『白居易研究』(世界思想社 一九七二)第一章・白居易の生涯、太田次男『諷諭詩人 白樂天』(中國の詩人 10)(集英社 一九八三)二二二頁、村上哲見「白居易と杭州・蘇州」(『白居易研究講座 第一卷』勉誠社 一九九三)など。

(35) 注34に挙げた三例は、すべて蘇州刺史時代の「吳郡詩石記」を據り所として示している。

(36) 白居易の杭州「西湖」に對する感情を「トポフィリア」と捉えることについては、既に大室幹雄氏による論攷がある(前出、『西湖案内 中國庭園論序説』など)。

(37) 前出『トポフィリア—人間と環境—』第八章「トポフィリアと環境」(二六〇頁)

(38) 前出『トポフィリア—人間と環境—』第六章「文化・經驗・環境への態度」(一五一頁)。

(39) この間の經緯については、太田次男『諷諭詩人 白樂天』の「【六】詩と佛教に生きる」を參照。

(40) 芳村弘道「白居易の杭州刺史轉出」(『學林』第二十一號) 白居易の愛した風景(鎌田)

中國藝文研究會 一九九五)

(41) 白居易の杭州赴任については、『舊唐書』(卷一六六)の白居易傳には「乃求外任」とあり、『新唐書』(卷一一九)の白居易傳には「乃丐外遷」とある。

(42) 『白居易集箋校』(卷八 四二〇頁)に、「(朱金)城按：白氏有商山路驛桐樹昔與微之前後題名處詩(卷十八)及答桐花詩(卷二)。」とある。

(43) 『全唐詩』では、詩題を「重題」に作るが、ここでは連作としての第一首の詩題をそのまま用いる。

(44) 松浦友久編『校注 唐詩解釋辭典』(大修館書店 一九八八 再版)所收「香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」についての、埋田重夫の解説を參照。

(45) 村上哲見氏は、「中書舍人から地方轉出という、事情によつては悲壯な心情で出發することにもなりかねない旅であるのに、四十首の詩の全體に流れる情緒は、そうした悲壯とか憂悶などとはおよそ無縁である。」とする(前出「白居易と杭州・蘇州」三〇三頁)。

(46) 花房英樹『白氏文集の批判的研究』(塙文堂書店 一九六〇)所收の「綜合作品表」に據る。

(47) 下定雅弘「白居易詩の轉形期——江州時代から杭州時代へ——」(『鹿兒嶋大學法文學部紀要 人文科學論集』第26號) 鹿兒嶋大學法文學部 一九八七)の「五 杭州時代」參照。

(48) 吉川忠夫「白居易における仕と隱」(『白居易研究講座 第

中國詩文論叢 第十七集

一卷』勉誠社 一九九三 二二二頁。

(49) 自注に、「自以後詩到杭州後作」とある。

(50) 元稹の「寄樂天」(初句「莫嗟虛老海堦曲」)(417)に答えたもの。

(51) ここでの「若耶溪」は、「鏡湖」を意識するものと言える。

例えは『大清一統志』(卷二九四 紹興府一)に、「(若耶溪)若耶山下、北流入鏡湖」とある。

(52) 『元和郡縣圖志』卷二十六・江南道二(中國古代地理總志叢刊)(中華書局 一九八三)。

(53) 前出『空閒の經驗——身體から都市へ——』二九〇頁、參照。

(54) 杭州時代の白居易が、士大夫としての「兼濟」の思い出を抱いていたことは、例えは「三年爲刺史 二首」(41)や「別州民」(46)からも窺える。